

東海地方における骨角製「狩猟具」小考

川添和暁

はじめに

東海地方は、東北地方・関東地方に続く貝塚地帯として知られ、比較的多くの骨角器の出土が知られている。東北地方・関東地方などでは資料がまとまっており、生業・精神文化など各地域ごとの骨角器研究が古くからなされている。最近では日本列島全体での骨角器縄文時代の様相（金子・忍澤 1986 など）、縄文時代・弥生時代を通じての様相（大竹 1989）や各地の様相が各地研究者によってまとめられている。また東海地方に関しても、上敷領久氏による縄文時代の骨角器研究がある（上敷領 1989）。今回は骨角製「狩猟具」と報告されているものに限って、東海地方でも愛知県下出土資料を中心に若干の考察を試みたい。時代は縄文時代・弥生時代の資料を取り上げることとする。また対象とする遺物は、「鏃」・「根挟み」・「弭形（角）製品」と報告されている遺物である。なお「弭形製品」と報告されている遺物に関しては、題目の関係上、先学により一部用途として弭ではないとされる例もあるが、ここでは一旦含めることとする。

研究小史

骨角器自体報告された歴史は古い。東海地方の骨角器についてもかなり早い段階から報告がなされている（大野 1901・1905、大林 1905 など）。その中でも、特に大野雲外氏は稲荷山貝塚出土の「矢筈」（根挟み）・「弓筈」（弭形製品）に関する用途的研究を行っており、注目される。

大正時代から昭和時代初期にかけて清野謙次氏などによる人骨収集目的の貝塚発掘が多く行われた。そのなかで吉胡・伊川津・保美貝塚などでは人骨ばかりではなく、多くの骨角器も出土してい

る。これらの発掘では、腰飾りや貝輪など、人骨に伴う装身具の発掘成果が大いに注目されるものの、狩猟具・漁具・生活用具といった骨角器の出土も多く見られ、ほぼ器種も出揃っている（清野 1925・1969）。当地方の縄文時代の骨角器の様相がほぼ明かとなったばかりではなく、その後の詳細に時期比定された発掘資料とともに、東海地方の独自性を示し、縄文時代の生業・精神文化の解明にも重要な基礎資料となった。

また、当地方は弥生時代の貝層を含む集落遺跡が全国の中でも多く見られる。特に、西志賀貝塚・朝日遺跡・瓜郷遺跡などの発掘では、貝層中から多くの骨角器が出土し、当地方の弥生時代骨角器の様相が明瞭となった。特に朝日遺跡から出土した骨角器は、遺跡の存続期間が長いこと、当地域のみならず、弥生時代の骨角器利用の実体とその変遷を考察する上で、一つの指標となりうる資料であり、大いに注目される（伊藤 1972・中川 1982・宮腰編 1992）。

最近では全国的な骨角器の集成・概説がなされている。それらの研究の論旨は日本列島全体の状況を踏まえて、各地域の骨角器の特徴を把握し、それぞれの生業の複元を試みているようである。そのなかで金子・忍澤両氏のように全国的な動向のなかで東海地方の骨角器の研究動向について言及している（金子・忍澤 1986）。狩猟具に関しては、「弭形角製品の出土が目立つ」とのみ言及している。一方、これまで特に生業に関わる骨角器の研究は、資料の豊富な東北地方・関東地方が中心であったといえる。最近では東海地方の骨角器を対象とし、縄文時代全体のなかでの生業形態の位置付けを解明する研究も少しずつなされている。上敷領久氏は伊川津貝塚など渥美貝塚群出土の根挟

み・ヤスを特に取り上げ、生業形態復元を試みている（上敷領 1987）。

以上から、当地方は骨角器を通じて、縄文時代・弥生時代を継続して考察するのに比較的資料が豊富であるといえ、ここに独自性の一端がある。一方、一般に生業に関する骨角器研究は、縄文時代では、東北地方・関東地方の研究成果の上に成り立っており、弥生時代では、縄文時代の研究成果の上に成り立っているのが現状である。ここに他地域との比較を無視できない状況にあるといえる。また各器種ごとの先学の研究に関しては、それぞれにて触れていくこととし、ここでは省略する。

各遺物の概要

1. 鏃

鏃は一般的に有茎と無茎とに分けられるが、今回対象とする資料においてはすべて有茎が占める⁽¹⁾。さらに、a類：基部と茎部との区別が明瞭で断面が円形・楕円形を呈するもの（第1図1～7）、b類：基部と茎部との区別が明瞭で、断面が扁平なもの（第1図8・9）、c類：基部と茎部との区別が不明瞭なもので、平面形態が柳葉状を呈するもの（第1図10・11）に分けることができる。

鏃a類は、縄文時代早期に属する天神山貝塚の例が初出である（第1図1）。それ以降、縄文時代後期後葉以降に多く見られるようになる（同図2～4）。弥生時代中期にはまたいくつかの例が知られている（同図5～7）。縄文時代早期以降継続して使用された基本的な形態であり、弥生時代以降も継続して使用されたと思われる⁽²⁾。鏃b類は、愛知県内では朝日遺跡から出土した弥生時代中期、朝日式に伴う資料が確実な上限であり（第1図8）、弥生時代中期を中心にみられる形態である⁽³⁾。この形態の中には金属製品を模し

たものがみられることが特徴である（伊藤 1972・中川 1982・宮腰編 1992）。鏃c類に関しては、明確には枯木宮貝塚などで縄文時代晩期前葉には出現している（第1図10）。下限は、朝日遺跡で弥生時代中期の朝日式期から貝田町式期までの資料が知られており（第1図11）、弥生中期までは存続していたようである。

材質に関しては、今回対象とする資料については、獣骨製と鹿角製である。

2. 根挟み（第1図12・13）

根挟みは矢の一部分となるもので、多くは鏃の一形態として扱われることが多いが、ここでは当地域の骨角器を特徴付ける器種であることから、独立して扱うこととする。

当地域での出現時期は、伊川津貝塚からの縄文時代後期末主体の層から出土した例や（小野田他 1989）神明社貝塚からの縄文時代後期後葉から晩期初頭に属する例（渡辺 1989）などから、後期後葉末までは遡りうる。静岡県西貝塚からは後期後葉の宮滝式古相に伴う資料が知られている。根挟みが大いに盛行するのは縄文時代晩期前葉の寺津式から晩期中葉の稻荷山式に伴う時期までである。それ以降急激に減少し、縄文時代晩期末・突帯文土器に伴う可能性は低くなるとみられる。

根挟みについては既に先学によって様々な考察がなされている（渡辺 1972・上敷領 1987・西本 1987 など）。渡辺氏は、全国的に所属時期・分布・捕獲対象動物を見据えた動物相との考察を行っている。また上敷領氏は、伊川津貝塚出土資料から根挟みおよびその先端に装着したと思われる石鏃に対して統計学的な分析を行っている。西本氏は、東北地方・関東地方・東海地方の「ネバサミ」周辺の考察を行い、特に東海地方の地域性を考察している。以上のことを踏まえて検討を加える。

根挟みの用途は先学により検証済みであり、加えて宮城県中沢目貝塚から石鏃と根挟みとが装着された状態で出土していること(須藤編 1984)からも、見解の一致が得られている。使用時に石鏃との装着部分に強い力が加わるためか、半欠状態のものが多くみられる(第1図13)。最大幅は1cm以上2cm以内のものがほとんどで、大きな差は見られない。一方、長さは数値に幅が見られるが、最大で10cm程度、最小で3.5cm前後である。破損しても再加工して使用した可能性を考慮して、機能上最低でもほぼ3.5cm以上の長さは必要であったと考えられる。問題はその出現の背景から、盛行・衰退の背景である。出現の背景に関しては渡辺氏が種物相との関係から「捕獲対象物との関係において根挟み出現の背景を探ることは困難の感がある」としながらも自然遺物の研究を力説されている(渡辺 1972)。現在までのところこの事情は変わらないようである。なお清野謙次氏はその機能的な面から、「多分毒矢としての効果があるものだと思う」と述べており、示唆的である(清野 1969)。

なお、材質は鹿角のみである。

3. 弭形製品

弭形製品には大きく二形態のものを含めた。a類：古くから「弭形角製品」として知られているもの、b類：いわゆる「浮袋の口」として知られているもの、である。a類・b類を同一器種として一括することには、まだ検討の余地があるのかも知れない。しかし、東北地方などでは装飾的な彫刻が施されていたり、表面が赤褐色を呈するものがあるなど、a類とb類は密接した関係が想定されることから、ここではb類を弭形製品の一形態と考えることとする。

a類は形態上さらに三つに細分が可能である。

a1類：上部の装飾が無し、もしくは刻み目のみの

もの、a2類：上部の装飾に水平方向の穿孔が施されるもの、a3類：水平方向の穿孔に棒状の装飾が付されるもので、多くは水平方向の穿孔が複数平行に施されているもの、とすることができる。

a類の確実な上限は、縄文時代後期後葉に属すると思われる、伊川津貝塚の例であり(第2図3)、それはa1類である。縄文時代晚期前葉に本格的に盛行し、弥生時代前期までは連続して見られる(第2図5)。三重県白浜貝塚では弥生時代中期以降の例も存在していることから、数量は減少するものの残存していた可能性がある。a2類は縄文時代晚期前葉主体の本刈谷貝塚から見られることから、晚期前葉には出現している可能性がある。縄文時代の例は貫通された孔が一行か、二列でも互いが直交している例(第2図1・2)が特徴的である。a3類は弥生時代前期以降見られる形態である。当地域で棒状の装飾が付された状態の発見例は朝日遺跡の例(第2図7)や瓜郷遺跡・自浜貝塚など弥生時代中期以降である。

形態的な見地から、a1類からさらに装飾性のあるa2類が発生したと思われるが、縄文時代晚期を通じて両者は併存した。弥生時代初頭には後出したa2類が消滅した後も、a1類は継続している。a3類に関しては、弥生前期以降の出現であり、編年的にはa2類に後続するかに見える。しかし、水平に穿孔された複数の孔が、a2類では直交しているのに対して、a3類では平行していることから、a3類はa2類から区別して考えなければならぬであろう。このことは、日本列島全体の出土状況にて、a3類は九州地方や大阪などでも弥生前期という早い時期から出現しており、発生して以来、古墳・擦文時代まで、分布域が次第に東進していくなど、a1・a2類とは状況が大いに異なることから、考えなくてはならない。

b類はさらに二形態に細分することができる。

b1類：中央くびれ部を挟んで上下の比率がほぼ

等しいもの、b2類：中央くびれ部を挟んで下部に比べて上部が長いもの、である。

b類で時期が明確な上限は、伊川津貝塚から出土した縄文時代晩期中葉の例で、b1類である。枯木宮貝塚・西の宮貝塚など縄文時代晩期前葉を主体とする遺跡からも出土しており、晩期前葉までは遡るであろう⁽⁴⁾。b1類は縄文時代晩期を中心に盛行し、現在までのところ弥生時代以降は衰退していくようである。しかし、愛知県知多市法海寺遺跡からは弥生時代中期から古墳時代中期までに属する例が出土しており(第2図11)、b1類は少なくとも弥生時代中期までは継続していたものと思われる。一方、b2類の出現は弥生時代中期になってからである。朝日遺跡では貝田町式に伴った例が、瓜郷遺跡では弥生時代中期から後期にかけての例(第2図12)が知られている。

材質に関してはa類・b類すべて鹿角製で、特にb類に関しては、鹿角の先端部か先端部に近い部分を使用していると思われる。

弭形製品が狩猟具の中で注目される点は、生業に関わる製品でありながら、装飾性に富むなど、精神文化の一端が伺える所にある。当地の縄文時代における消長は、東北地方から近畿地方までほぼ同様な傾向としてとらえられる。その中でもa類に関しては当地域がa2類などのように装飾性を発達させた一中心地であったと考えられる。b類に関して、東北地方のような装飾性に富んだ例は現在までのところ知られていない。しかし当地域では弥生時代以降もb類が見られることに大きな特徴があり、その点でa1類と共通する。

なお、a3類に関しては、「弭形製品」やそれに類似した名称が付されている報告例が多いことから、今回弭形製品の一形態として取り上げた。しかし唐古遺跡例の小林行雄氏による報告以来、弭ではなく「弦楽器の弦の固定と調節のための部品」と先学によって多く論じられている(例えば

武井1972・瀬川1972など)。棒状の装飾を機能的なものにとらえた解釈として大いに注目され、これがa1・a2類との日本列島における分布域の差として現れているのであろう。

若干の考察

1. 骨角製「狩猟具」より見た画期

遺物の出土状況などから、次の5時期に分けることができる。

(a) 縄文時代早期末から同後期中葉

「狩猟具」に関しては、天神山貝塚の縄文時代早期末の資料が最も早い例であり、それ以外、明確に「狩猟具」と位置付けられる資料は、ごくわずかである。現在までのところ、骨角器の資料自体あまり多くない時期であるが、その器種には「尖頭器」や「刺突具」と報告されているものが多い。これらのもののなかには骨鈷やヤスも含まれている可能性が高い。特に、この時期継続して骨鈷a1類は使用されたと考えられる。

(b) 縄文時代後期後葉から同晩期後葉

当地方において、骨角器の資料自体が増える時期である。「狩猟具」についてもこの傾向が見られ、鈷a・c類・根挟み・弭形製a・b類とほぼ出揃う。この時期の特徴的なものに根挟みと弭形製品b類がある。前者に関しては、短期間のうちに出現・盛行・衰退するが、その背景に関して、引き続き大きな課題となるであろう。

特に根挟みの出現は、当地方の骨角製「狩猟具」の第一の盛期を特徴づけるものであるといえる。特に、狩猟具である根挟みと漁具であるヤスとのそれぞれの盛行の始まりがごく近い時期であるようであることは注目される。

最近東海地方の貝塚についてまとめられた齋藤弘之氏は、縄文時代を通じて貝塚の盛期を二時期

設定している。一つ目の盛期を早期後葉から前期中葉にかけて、二つ目の盛期を後期中葉から晩期中葉にかけてである（齋藤 1998）。縄文時代において骨角製狩猟具が盛行するのが上記のように後期後葉から晩期中葉であることと対比させると、貝塚の盛期との時期差が指摘でき、特に二つ目の盛期の始まりと骨角製狩猟具の盛期の始まりとの時期差は注目される。この盛行の時期の始まりが元住吉山 式から宮滝式などの近畿地方の凹線文土器の影響を受けた時期でありながら、狩猟具のみならず漁具など生業に関わる骨角器が東京湾を中心とする関東地方からの影響で時期的に順を追って盛行することは注目されるべきである。

根挟み・弭形製品 b 類は晩期後葉には見られないようである。それ以外の器種は、弥生時代へ引き続き使用されていったようである。

(c) 弥生時代前期

弥生時代前期に入って、弭形製品 c 類の出現が大きな特徴である。出現時の分布範囲が遠賀川式土器の出土範囲内であることから、これまでの弭形製品とは異質なものであるものと考えられる。しかし、鹿角の先端部を使用するなど製作技法などで共通する部分もあり、また当地方では朝日遺跡で弭形製品 a 類と c 類が共存することが大いに注目される。

(d) 弥生時代中期

この時期に鏃 b 類が初出し、縄文時代から継続していた鏃 c 類は次第に見られなくなる。鏃 b 類には金属製の鏃を模したと思われるものが含まれており、当地域に金属器が伝わってきた時期であることを裏付けている。骨角器と金属器との関係で言えば、現在までのところ骨角器の製作に関して、最も早くに金属器の加工痕がみられるのは、朝日遺跡出土の固定鋸頭（中川 1982）であり、

その時期は弥生時代中期の朝日期であることが知られている（渡辺 1994）。金属器の導入は石器ばかりではなく、骨角器においても特に製作・形態に関して大きな画期となりうるものである。

(e) 弥生時代後期以降

この時期は、器種の種類としては前時期の継続であり、古墳時代へとつながる。骨角器自体の資料数が少なくなってくるが、原因として骨角器の保存に適した貝層部分を持つ遺跡の減少ばかりではなく、金属器との関係が影響していると思われる。弥生時代後期以降は釣針や鋸などが金属器で作られるようになることが知られているが（渡辺 1973）狩猟具の中でも鏃などは同一の傾向を辿っているのではないのかと思われる。

それまで骨角器で作られていた多くの製品が金属製品にとってかわるなか、継続して骨角器で作られる器種も存在することは注目される。それは貴重な金属製品の代用として製作された場合と、骨角器でしか製作できず他の器種では代用できない場合の、両者が想定される。「狩猟具」のなかで前者に当たるのが鏃であり、後者に当たるのが弭形製品である。

以上、骨角製「狩猟具」に関して述べてきた。この状況は当地域の生業に関わる骨角器の様相をある程度反映していると思われる。

2. 「狩猟具」として取り扱った器種について

今回、「狩猟具」として報告されることの多い器種として、鏃と弭形製品を取り上げてきた。弭形製品に関しては、a1・a2 類と a3 類と b 類の三者の関係をさらに検討しなくてはならない。a3 類は「弭形製品」と報告されているものの、a1・a2 類とのつながりは希薄であるようである。b 類に関しては、現在までのところ、東北地方のような装飾性の濃い例が、当地方にみられないこと

が注目される。東北地方の場合に比べてa類とb類との隔たりが大きいのかもしれない。

今後の課題

1. 各時代の狩猟活動の復元

骨角製狩猟具を含む骨角器は、材質の性質上、貝塚など残存する遺跡の条件が限られている。貝塚などでは捕獲対象動物であったと考えられる獣骨類が自然遺物として残存していることもあり、道具とその対象物との関わりを追うことができる場合もある。特に根挟みに関しては、その発生・盛行・衰退の過程と表裏一体をなす問題であると思われる。今回はこのことに関して触れることができなかつたが、重要な問題であり、継続して取り組まなくてはならない。

2. 石器との関わり

石鏃・石槍など、狩猟具として使用された器種は骨角器よりも多く残存している。狩猟活動の復元にはそれらを含めた総合的な研究がこれからも必要である。特に、骨角製「狩猟具」に関連しては、根挟みに装着されたであろう石鏃の存在が注目される。現在、唯一石鏃と根挟みが装着された状態で出土した宮城県中沢目貝塚では、「凹基の薄手な石鏃」をピッチで固定されているとのことである(須藤他 1984)。このことに関して上敷領氏も考察を加えているが(上敷領 1987) 根挟み出現前後の資料も視野に入れた分析も必要であると思われる。

3. 金属器との関わり

弥生中期以降、骨角器と金属器との関わりに関しては、漁具に関して先学による指摘があり、鏃でも同様な変化があることは述べた通りである。一方、骨角器製作途中の鹿角・獣骨片が遺跡から出土することがあり、その製作技法の研究も引き

続き必要であろう。

今回の小考は、卒業論文「東海地方の骨角器」の中で「狩猟具」の部分のみ取り出し、修正を施したものである。特に名古屋大学文学部の渡辺誠教授には、学生時代以来、多くの御指導・御教示を賜った。厚く御礼を申し上げる次第である。また、資料の掲載を認めていただいた、愛知県教育委員会・天理大学附属天理参考館・東京大学総合研究資料館・豊橋市美術博物館・西尾市教育委員会・明治大学考古学博物館(五十音順、敬称略)には、深く謝意を表する次第である。

註

- (1) 静岡県蜷塚貝塚での「猪牙製装身具」もしくは「牙鏃」として報告されているものと、同西貝塚「牙鏃」とされているものは、無茎である。前者は蜷塚 式に伴い、後者は宮滝式古相に伴うものである(後藤他 1962・市原 1961)。
- (2) 「刺突具」「尖頭器」として報告されているものの中に、鏃 a 類・c 類のものも存在すると思われる。
- (3) 静岡県西貝塚では縄文時代後期後葉の宮滝式古相に伴ってこの形態の鏃が知られている(市原 1961)。
- (4) 静岡県では、石原貝塚や蜷塚貝塚で後期中葉蜷塚 式に伴う例が知られている(市原 1962・1967)。愛知県でも、吉胡貝塚など縄文時代後期後葉から盛行する遺跡からの出土例があることから、確実ではないがその時期まで遡りうるのかもしれない。
- (5) 楠本政助氏は、「浮袋の口」の用途に関して、固定銚のソケットであることを提唱され、実験考古学の立場から検証をされている(楠本 1976)。東海地方では、固定銚の出現と「浮袋の口」との出現時期に差が見られること、固定括と柄が装着された状態で唯一出土した朝日遺跡の例(宮腰編 1992)、瓜郷遺跡の例などではそれは不要と思われることなどから、東海地方では「浮袋の口」が固定銚のソケットとする状況は見当たらないといえる。

資料所蔵機関一覧

- 第1図2・13、第2図5 名古屋大学文学部考古学研究室
 第1図3・4・10 西尾市教育委員会
 第1図5、第2図8 豊橋市美術博物館
 第1図6、第2図6・7 愛知県教育委員会
 第1図7・8・11 (財) 愛知県埋蔵文化財センター

第1図12、第2図1 東京大学総合研究資料館
 第2図2 明治大学考古学博物館
 第2図4・10 天理大学附属天理参考館

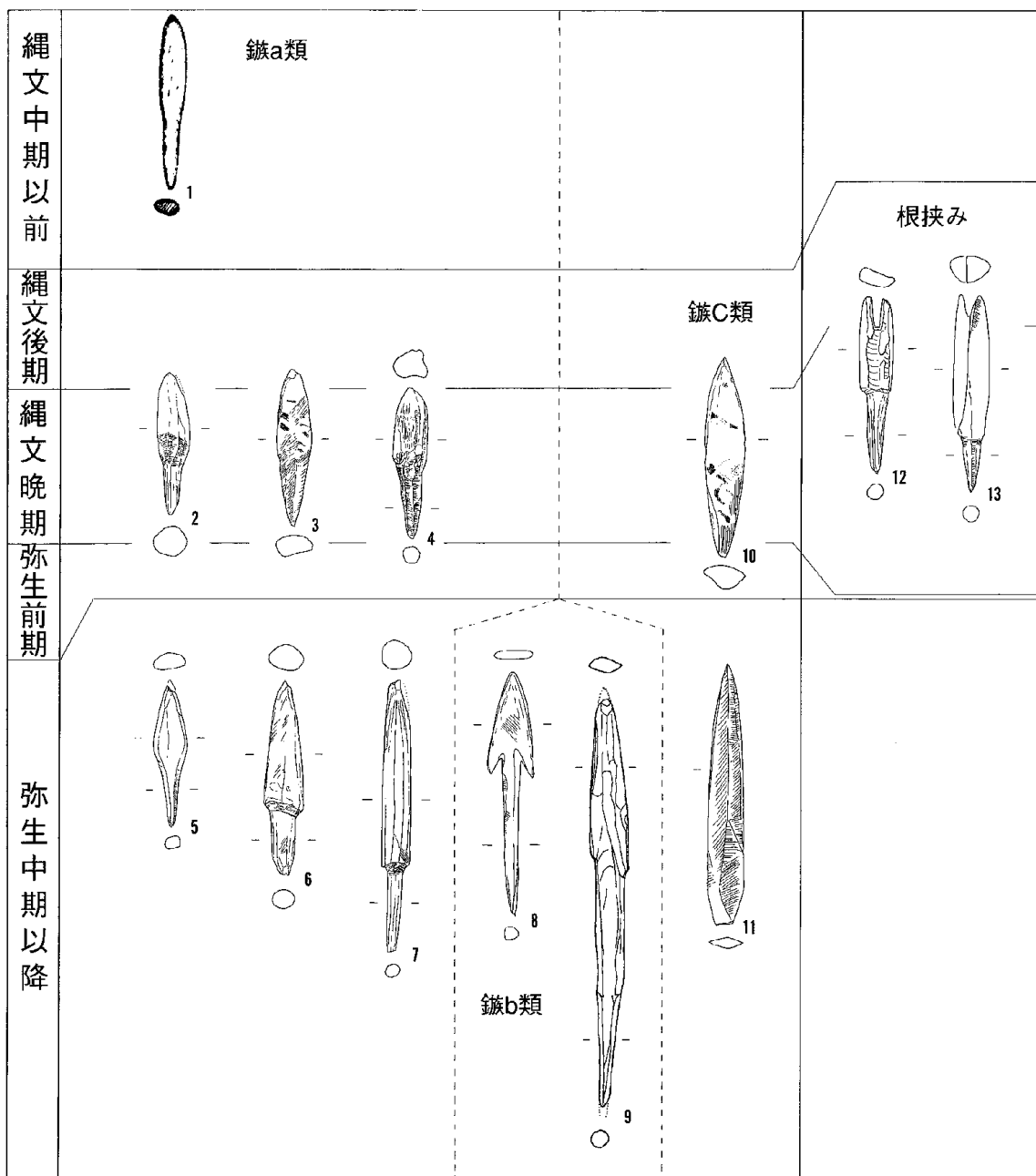
参考文献

市原寿文 1961「石器、骨角器」『西貝塚』55～80頁
 磐田市教育委員会
 市原寿文 1962「石器と骨角器」後藤守一他『蜆塚遺跡総括篇』91～104頁 浜松市教育委員会
 市原寿文 1967「遠江石原貝塚の研究 - 縄文晩期における地域性の問題をめぐって -」『人文論集』18
 25～50頁 静岡
 伊藤 稔 1972「骨角製品」『貝殻山貝塚調査報告』
 20～21頁 愛知県教育委員会
 大竹憲治 1989『骨角器』 東京
 大野雲外 1901「三河国発見の鹿角を見て」『東京人類学会雑誌』16-182 321～325頁 東京
 大野雲外 1905「愛知県下旅行調査報告」『東京人類学会雑誌』20-230 344～351頁 東京
 大林意備 1901「三河発見陶石角器」『東京人類学会雑誌』16-183 381～584頁 東京
 大参義一・加藤安信・山田 猛 1989『刈谷市史』5
 刈谷市教育委員会
 大山 柏 1923「愛知県渥美郡福江町保美平城貝塚発掘概報」『人類学雑誌』38-1 1～25頁 東京
 小野田勝一・春成秀爾・西本豊弘 1988『伊川津遺跡』 渥美町教育委員会
 金子浩昌・忍澤成視 1986『骨角器の研究 縄文篇』 東京
 上敷領久 1987「東海地方先史時代の骨角器」『東アジアの考古と歴史』中 166～180頁 京都
 清野謙次 1969『日本貝塚の研究』 東京
 楠本政助 1976「縄文時代における骨角製刺突具の機能と構造」『東北考古学の諸問題』127～149頁 東北考古学会
 甲野 勇 1939a「所謂“浮袋の口に就て”」『人類学雑誌』54-2 1～12頁 東京
 甲野 勇 1939b「弭形角製品に就て(上)」『考古学雑誌』29-9 14～18頁 東京
 甲野 勇 1939c「弭形角製品に就て(下)」『考古学雑誌』29-10 39～47頁 東京
 紅村 弘 1963『東海の先史遺跡 総括篇』 名古屋
 後藤守一他1962『蜆塚貝塚 総括篇』 浜松市
 教育委員会
 齋藤弘之 1998『企画展 東海の貝塚 - 食べる祈る 葬る - 』 安城市博物館
 杉原荘介・外山和夫 1964「豊川流域における縄文時代晩期の遺跡」『考古学集刊』2-3 37～101頁 東京
 瀬川芳則 1972「弓矢状鹿角製品についての一考察」『勝部遺跡』145～153頁 豊中市教育委員会

武井則道 1972「いわゆる「弓矢状有栓骨角製品」について」『貝塚』9 1～5頁 東京
 立松 宏 1977「考古」『半田市誌 文化財篇』53～76頁 半田市
 中川真文 1982「骨・角・牙・貝製品」『朝日遺跡』79～87頁 愛知県教育委員会
 中村文哉編 1992『平井稲荷山』 小坂井町教育委員会
 名古屋市博物館 1982『吉田富夫コレクション』 名古屋
 西本豊弘 1987「骨角製漁具 - とくにネバサミについて -」『季刊考古学』21 68～71頁 東京
 芳賀 陽 1997『水神貝塚』 豊橋市教育委員会
 久永春男 1972『伊川津貝塚』 渥美町教育委員会
 萩本 勝編 1990『白浜貝塚発掘調査報告』 鳥羽市
 服部哲也編 1987『瑞穂遺跡 第4次調査の概要』 名古屋市教育委員会
 久永春男 1963『瓜郷遺跡』 豊橋市
 牧 富也・杉浦敦太郎・神谷和正 1973「原始・古代」『西尾市史』683～1161頁 西尾市
 宮腰健司編 1992『朝日遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 森 達也 1972「第3節 骨角器、貝製品」『本刈谷貝塚』77～82頁 刈谷市教育委員会
 吉田富夫・紅村 弘 1958『名古屋市西志賀貝塚』 名古屋
 立教大学博物館学講座 1966a「大築海貝塚の発掘調査」『MOUSEION』9 46～50頁 東京
 立教大学博物館学講座 1966b「阿津里貝塚の発掘」『MOUSEION』9 56～59頁 東京
 渡辺 誠 1972「鹿角製根挟みに関する覚え書き」『小田原考古学研究会会報』5 104～110頁 小田原
 渡辺 誠 1973『縄文時代の漁業』 東京
 渡辺 誠 1980「骨角器」山下勝年編『先刈貝塚』77頁 南知多町教育委員会
 渡辺 誠 1989「自然遺物と骨角製品」山下勝年編『神明社貝塚』155～188頁 南知多町教育委員会
 渡辺 誠編 1990『法海寺遺跡』 知多市教育委員会
 渡辺 誠 1994「骨角器」中村文哉編『欠山遺跡』61～64頁 小坂井町教育委員会

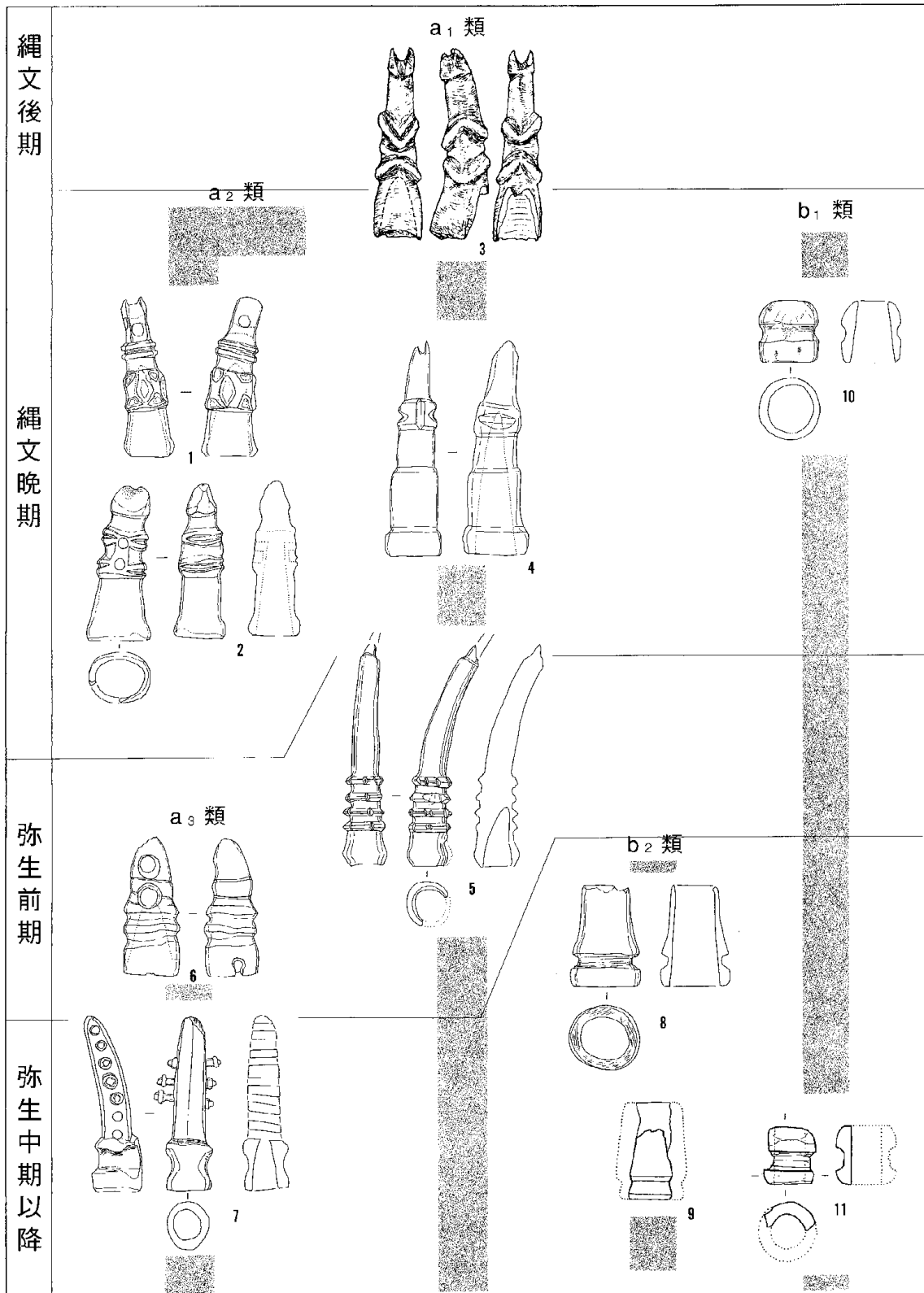
遺跡名	時 期	鑑			根拠		頭形製品		参 考 文 献
		a 類	b 類	c 類	a 類	b 類	a 類	b 類	
静岡県磐田市石原貝塚	縄文後期前葉～中葉						○		市原1967
静岡県磐田市西貝塚	縄文後期	○	○	○					清野1969、市原1961
静岡県浜松市蛸塚貝塚	縄文後期	○							後藤他1955・1958・1960・1961・1962
愛知県稲沢市一色青海遺跡	弥生中期			○					藤山編1998
愛知県西春日井郡清洲町朝日遺跡	弥生前期～後期	○	○	○					伊藤1972、中川1982、宮藤編1992
愛知県名古屋北区志賀貝塚	弥生前期	○	○						吉田1933、吉田・紅村1958、杉原・岡本1961
愛知県名古屋市中区古沢町遺跡	縄文晩期中葉～後葉					○			吉田・和田1971、安達1997
愛知県名古屋市中区瑞穂区瑞穂遺跡	弥生中期末～後期初頭			○					吉田1961、紅村1963、名古屋市博物館1982、服部編1987
愛知県名古屋市中区緑区雷貝塚	縄文晩期前葉					○			小栗1933、吉田・杉原1939、清野1969、安達1997
愛知県知多市法海寺遺跡	弥生中期～古墳時代中期			○		○			渡辺編1993
愛知県知多市西屋敷貝塚	縄文晩期中葉～後葉					○			杉崎1958、紅村1963
愛知県知多市大草南貝塚	縄文晩期前葉					○			紅村1963
愛知県知多郡南知多町天神山貝塚	縄文早期末					○			紅村1963
愛知県知多郡南知多町咲畑貝塚	縄文中期中葉～後期前葉					○			磯部・杉崎・久永1960
愛知県知多郡南知多町神明社貝塚	縄文後期後葉～古墳					○			渡辺1989
愛知県知多郡南知多町新井浜貝塚	弥生前期～後期					○			宮川・磯部・杉崎1979
愛知県知多郡東浦町宮西貝塚	縄文晩期前葉～中葉								紅村1963、加藤1968
愛知県半田市西の宮貝塚	縄文晩期					○			立松1977
愛知県刈谷市中山貝塚	縄文晩期					○			大夢・加藤・山田・川合1989
愛知県刈谷市本刈谷貝塚	縄文晩期前葉～中葉					○			森1972
愛知県安城市堀内貝塚	縄文晩期								紅村1963、牧・杉浦・神谷1973
愛知県西尾市枯木宮貝塚	縄文晩期	○				○			牧・杉浦・神谷1973
愛知県宝飯郡小坂井町稲荷山貝塚	縄文晩期中葉前半～弥生初頭	○				○			杉原・外山1964、清野1969、中村編1992
愛知県宝飯郡小坂井町欠山遺跡	弥生後期	○							久永1963・渡辺1994
愛知県豊橋市瓜郷遺跡	弥生中期～後期	○	○	○		○			久永1963
愛知県豊橋市水神貝塚	縄文晩期								芳賀編1997
愛知県遷美郡田原町吉川貝塚	縄文後期後葉～晩期	○				○			文化財保護委員会1952、清野1969
愛知県遷美郡遷美町伊川津貝塚	縄文後期後葉～晩期	○				○			小金井1905、久永1972、小野田他1988・1995
愛知県遷美郡遷美町保美貝塚	縄文後期～弥生	○				○			大山1905、小林他1966、小野田1977、久保1995
三重県鳥羽市白浜貝塚	弥生中期～古墳後期	○	○	○					秋本編1990
三重県鳥羽市大葉海貝塚	縄文晩期末・古墳前期					○			立教大学博物館学講座1966a
三重県志摩郡志摩町阿津里貝塚	縄文中期、古墳前期初頭			○?		○			鈴木1955、立教大学博物館学講座1966b

第1表 東海地方における骨角製「狩猟具」出土地一覧表



第1図 鍬・根挟み変遷図(1:2)

1 天神山(紅村1963より転載) 2・13 吉胡 3・4・10 枯木宮 5 瓜郷
6~8・11 朝日 9 法海寺(渡辺編1993より転載) 12 保美



第2図 弭形製品変遷図 (1:2)

1・2・4・10 稲荷山 5・6・7 朝日 3 伊川津 (西本1988より転載)

8 瓜郷 9・11 法海寺 (渡辺編1993より転載)